

令和3（2021）年度

教養ゼミ（初年次教育科目）

実施状況報告書



福山大学

FUKUYAMA UNIVERSITY

..... 【 目 次 】

経済学部 経済学科	1
経済学部 国際経済学科	3
経済学部 税務会計学科	4
人間文化学部 人間文化学科	6
人間文化学部 心理学科	8
人間文化学部 メディア・映像学科	10
工学部 スマートシステム学科	11
工学部 建築学科	12
工学部 情報工学科	13
工学部 機械システム工学科	14
生命工学部 生物工学科	17
生命工学部 生命栄養科学科	19
生命工学部 海洋生物科学科	21
薬学部	23

経済学部 経済学科

■ 担当者氏名

(代表) 田中 征史

吉田 卓史、三川 敦、石丸 敬二、李 森、早川 達二、中村 和裕、藤本 倫史、
野田 光太郎、北浦 孝、佐藤 彰三、櫻木 規美子、楠田 昭二、村松 悠次、高羅 ひとみ

■ ゼミ数, ゼミの学生数

令和3年度新入生166名と再履修生7名の計173名を、学生番号順に15クラスに分割した。1クラスあたりの学生数は11名であった。

■ 実施内容

対面授業回を増やすため、令和2年度よりも担当教員数を2倍に増やすことにより、1クラス当たりの学生数を減らした。そして、授業をクラス担任別で実施する授業回ではレベル1・2ともに対面授業を行い、受講生全体で受講する授業回ではレベル1・2ともに遠隔授業で実施した。これにより、令和2年度と比較して、対面授業の割合を30%程度上昇させることができ、クラス担任が定期的に学生と面談等を行う機会を確保した。また、遠隔授業回は主にビジネス能力検定3級(前期)と2級(後期)の対策講座をそれぞれ8回ずつオンデマンドで実施した。オンデマンド教材により繰り返し学習することができ、また、理解度チェックのための小テストを課題として出すことにより、資格試験に向けて継続して学習させる環境を提供した。

【クラス担任別の対面授業の実施内容】

- ・大学4年間の行動計画の作成・プレゼン発表(2回)
- ・グループワーク(4かい)
- ・学習指導+個別面談(5回)

【受講生全体での遠隔授業の実施内容】

- ・ビジネス能力検定対策講座(16回)
- ・レポートの書き方講座(3回)

■ 教養ゼミの特徴

初年次教育として「教養ゼミ」は、高校から大学への学習環境をスムーズに移行するための学習スキルを身につけて学習意欲の向上にも効果をあげている。円滑な大学生活を送るために必要な知識や情報を得ることを重視する。また、大学生活を通じて資格取得を促進させる目的で、ビジネス能力検定試験の対策講座を教養ゼミ内で実施した。また、レポート作成の演習により、基礎的なライティングスキルの向上を図った。

■ 成 果

R3年度経済学科で実施した教養ゼミの代表的な成果は、以下のとおりである。

- ・ビジネス能力検定3級合格者が135名(昨年度は151名)、2級合格者が106名(昨年度は53名)となった。入学生数が昨年度と比較して20名程度減少している中で、2級合格者の数が前年比2倍という高い成果をあげることができた。
- ・R3年度からの新しい試みとして、クラス担任別の対面授業回にグループワークを行い、最終的には、プレゼン発表を行うという授業を導入した。グループ内でリーダーを中心に協議や作業分担を行い、プレゼン発表をさせるという新入生にはやや難易度の高い内容であったが、アクティブラーニングとしての学習効果も高いと感じられた。(楠田クラスのプレゼン発表の様子は学長室ブログに掲載された。)

■ 課 題

- ・ 1 クラス当たりの学生数を減らすために、R2 年度までと比較してクラス数を 2 倍に増やした結果、授業教室の確保が困難となった。このため、一部クラスではグループワークやプレゼン発表に適さない教室を割り当てざるを得ない状況であった。特に、プロジェクターもモニターもない教室での授業実施は不便であった。R5 年度に向けて、(経済学部占有教室を中心に) 小教室へモニターの導入を予算要求する予定。
- ・ クラス担任別の対面実施回では、授業内容は全クラス共通として各担任に授業実施をお願いしてきたが、クラスごとで達成度にバラつきが生じたように感じる。R4 年度でも同様のクラス担任別授業は行う予定であるため、各教員からのフィードバックをもとに実施内容の改良を行っていく予定。

■ 担当者氏名

(代表) ビセット・イアン・ジェームス、白 映旻、佐野 穂先

■ ゼミの学生数

31 名（うち留学生 3 名）

■ 実施内容

学生用ツール：学内の IT システムの使い方と、新型コロナウイルス禍による対面講義中断の場合を備えた遠隔講義の受講方法

学生用ツール：電子メールの使い方及び正しいメールの書き方

学生用ツール：大学での勉強方法（図書館の利用方法など）

学生用ツール：プレゼンテーションの方法と、英語と日本語のプレゼンテーション資料の作成方法

学生用ツール：小論文の書き方、Microsoft word を使った正しい出典の引用方法

学生用ツール：Microsoft excel の簡単な分析モデル

ビジネス能力検定試験対策

■ 教養ゼミの成果等

例年に比べて、メールのマナーなど、教員とのコミュニケーション能力が向上した。

前年度（2020 年度）に比べ、可能な限り多くの対面授業を実施した。（具体的に定員 10 名の規制の時期には、クラスを 3 分割し、年間を通して生徒とのコンタクトを維持した。）

結果的に新型コロナウイルス禍による厳しい環境の中でも、学生は継続的に大学や教員とのつながりを維持することができた。

■ 問題点、改善点及び対応策

今年明らかになったのは、オンライン翻訳ツールの登場により、学生が簡単に英語で文章を作成できるようになったことである。オンライン翻訳ツールの登場により、英語で書かれた文章は簡単に作れるようになったが、いざプレゼンテーションを行うと、自分のパワーポイントに書かれていることが理解できていないことが明らかになった。そのため、来年度は、実際に知っている英語だけを用いて発表することに重点を置く予定である。

経済学部 税務会計学科

■ 担当者氏名

(代表) 長濱照美、小林正和

■ ゼミ数, ゼミの学生数

32名

■ 教養ゼミの特徴

- ・授業の実施とともに、2人の担任や学科教員による学生へのきめ細かい指導とサポートを行う点

■ 授業のねらい

学生の学力・能力の向上のための基盤を、以下により構築する。

- ・教員ならびに学生間の交流を深め、大学とのつながりを作る。
- ・安全に安心して学校生活を送れるようにサポートする。
- ・大学における学修への動機付けを高める。
- ・資格取得にチャレンジし、各自が自信を持てるようにする。

■ 実施内容

- ・大学における学修方法の指導（履修指導、講義の受け方、セレッソの使い方など）
- ・大学生活に関するオリエンテーション（健康管理センター、学生課、教務課などの紹介）
- ・税務会計学科の紹介（教員、授業、コースなど）
- ・教養講座の視聴とレポート提出（大学指定の講座）
- ・初年度における就職活動支援の実施（就職活動体験談・アルバイト講座の視聴及びレポート提出）
- ・自己紹介やグループディスカッションによる交流促進
（対面・セレッソ・Lineグループによる交流）
- ・コロナ渦の大学生活における注意喚起と工夫の共有
（コロナによる規制の随時確認・健康管理と行動調査票の提出呼びかけ・欠席状況の確認・生活リズムを整える工夫・家での過ごし方・体力低下及びメンタル不調への対処策）
- ・日商簿記検定試験受験の呼びかけ
- ・コミュニケーション・スキルの向上のための訓練（グループワークの実践）。
- ・ビジネス能力検定対策講座の実施。
- ・個人面談の実施（前後期2回実施）。

■ 成果

- ・遠隔授業の中、著しい単位取得不足、成績不良に陥る者を即座に発見し、保証人を含め細やかな対応を行った（本人が計画していた休学を回避）。
- ・遠隔授業の中、対面講義を基本としこれのメリットを最大限活用することで、学生同士のつながりが促進された。
- ・ビジネス能力検定を積極的に受検し、複数の学生は2, 3級同時合格を果たした。
- ・コロナ渦において「ガクチカ」力を高めた。
- ・教養講座で教養力を高めた。
- ・初年度から就職活動に関する講義を取り入れることで、キャリア形成に対する意識を向上させた。

■ 課 題

- ・ 授業において、教科担当（授業担当）教員以外の教員の参加が計画されなかった点
（入学当初、学科教員全員の自己紹介を行ったものの、その後のゼミでの関わりがなく、1年次終了時点で、教科担当以外の担任を含めて学科教員との関りがほとんどないといった学生が多数散見された。教科担当に質問や連絡がくることもあり、それは2年生になった現在でも変わらない。担任と連絡がとれないため教科担当に連絡していると説明する学生が多くおり、担任制が一部機能していない。なお、学生が担当をはじめとする学科教員を認識しておくことは、2年次後期のゼミ選択を円滑にするものであると考えられる。さらに、学生と教員とのコミュニケーションや所属意識にも影響すると思われる。）

人間文化学部 人間文化学科

■ 担当者氏名

(代表) 小原 友行

■ ゼミ数, ゼミの学生数

全1年次生57名

■ 授業のねらい

- (1) 1年次生全員が教員全員と顔を合わせる。
- (2) 学生全員がお互いに交流を深める。
- (3) 大学における「学び」について学ぶ。～調べる-考える-議論する～「専門」を意識する。

■ 学修の到達目標

大学生として必要なコミュニケーション能力の基礎となる力を身につける。

*コミュニケーション能力の基礎となる力：聴く力、話題に参加する力、質問する力、自分の言葉で自信を持って発表（プレゼンテーション）する力など。

■ 実施内容

※新型コロナウイルスの影響で、多くはオンライン授業（ゼレツソ）とした。4グループに分かれ対面授業も適宜実施した。

※共通調査テーマ：「多様性」

第1回 (4/15)	}	オリエンテーション。共通テーマについて、各自調査して教員に報告。〈全教員〉
第2回 (4/22)		
第3回 (5/1)		
第4回 (5/6)	}	教員のコメントをもとに各自調査を深化。
第5回 (5/13)		
第6回 (5/20)	}	グループの調査テーマについて、各グループ内で検討・決定。調査。
第7回 (5/27)		
第8回 (6/3)		
第9回 (6/10)	}	各グループのテーマに沿って各自調査・研究・報告。中間発表会。
第10回 (6/17)		
第11回 (6/24)	}	各グループ内で、教員のコメントをもとに調査・研究を深化。
第12回 (7/1)		
第13回 (7/8)		
第14回 (7/15)	}	各グループ内での最終発表会。各発表に対する交流会。学生サポーターによる授業。
第15回 (7/29)		

■ 教養ゼミの成果

ゼレツソ上での学生の議論やコメント、各課題の内容から、全員が到達目標に達したことを、学生・教員ともに確認した。

■ 問題点、改善点、対応策

コロナ禍の影響もあり、共通テーマに関する各グループ内での調査・報告・発表の方法を採用したが、グループ間や全体での交流会はできなかった。次年度は、全教員によるオムニバス形式による実施を検討している。

人間文化学部 心理学科

■ 担当者氏名

武田 知也, 金平 希, 福留 広大

■ ゼミ数, ゼミの学生数

ゼミ数3, 各ゼミに17名もしくは18名の1年生が所属した。

■ 実施内容

<前期>

- ピア・サポート訓練 (教員+SA)
自己紹介ゲーム, エゴグラム (性格検査) の実施, 他者への印象, 傾聴
- レポート作成を学ぶ (教員)
レポートの書き方に関して講義。レポートとは何か, レポートを作成する際の注意点, アカデミックライティングのコツ, “コピペ” の禁止, メールの打ち方, について解説した。また, 履修生はこの講義に関する要約型レポートを提出した。
- 新入生歓迎会 (2年生主催)
2年生が主体となってソフトバレーを体育館にて実施。
- 図書館ガイダンスを実施

<後期>

- スタディスキル (教員+SA)
文章要約の方法, 論文の構成・読み方, 論文の要約
- ビブリオバトル
グループで図書を一冊用意し, それについて, スライドを用いて発表した。
- 保健所によるゲートキーパー講座

■ 教養ゼミの成果

【授業全般】

前期は, ピア・サポート訓練, レポートの作成方法, 図書館ガイダンス, 新入生歓迎会が主な内容であった。ピア・サポート訓練では, 「ピア・サポートをはじめよう」をテキストに, 学生同士がサポートしあうためのスキルの訓練を行なった。レポートの作成方法については, 2021年度担当教員3名が協議を重ねて講義資料を作成した。レポートが作文や小論文とどのように異なるのか, どのように書けば説得的に書くことができるのかについて, アカデミックライティングの技法を解説した。また, コピペがなぜ許容されないのか, 適切な引用を行うための知識を解説し, 研究倫理に関する知識も深めた。履修生はこの講義について「要約型レポート」を作成した。レポートを作成する際の文献検索法については, 図書館ガイダンスを利用した。

後期は, スタディスキル, ビブリオバトルが主な内容であった。スタディスキルでは, 文章の要約方法, 論文の読み方から要約方法について, 本学科教員が執筆した論文を題材として学習を行った (山崎他 (2005) 大学生へのピア・サポート訓練による自尊感情や自己開示, 社会的スキルへの効果の検討)。また, ビブリオバトルでは, グループディスカッションや発表等の活動を通して, グループでの役割, 課題を見つけるところから発表までのプロセスを経験した。

【SAからのサポート】

ピア・サポート訓練, スタディスキル, ビブリオバトルでは, 各ゼミ1名のSAを利用し, 活動の補助が行われた。上級生がSAとして授業に参加することで, 1年生のピア・サポート訓練の効果が上がり, グループワークがスムーズに進むなど, 学年を越えた交流が促進された。

■ 今後の課題

コロナによる講義形式変更や個々人への対応はその都度協議を行っていたが、実際の遠隔対応は対面時とはかけ離れた環境であり、教養ゼミとしては非常に厳しいものであった。

■ 特記事項

心理学科教員が作成した冊子（ピア・サポート訓練のテキスト）を1年生に配付した。

新入生合宿オリエンテーションは中止となった。他方、新入生オリエンテーションでは、学生サポーターが時間割指導（2コマ×2日）、体育館でのレクリエーション（2コマ）を企画・実施し、新入生同士のコミュニケーションを促進し、コロナ禍という制限は受けつつも、仲間同士で支えあう風土を築くための活動を積極的に実施した。

人間文化学部 メディア・映像学科

■ 担当者氏名

(代表)：安田暁

■ ゼミ数, ゼミの学生数

ゼミ数：4 (一年次担任：中嶋、田中、内垣戸、安田)

ゼミの学生数：10 名程度

■ 前期実施内容

- 履修登録など教務関係のガイダンス
- Zoom や Zelkova、Cerezo 等、遠隔講義に対応するためのガイダンス
- 少人数ゼミ (大学での学びについて、ゼミ学生の交流、SNS の活用について、等)
- 学期末には、全員で一つのルームに集合しオンライン授業期間を乗り切った感想を互いに伝え合い、全員で互いに拍手を送って記念撮影をした
- SPI の過去問に取り組んだり、「私のトリセツ」を作成したりするなど、将来設計を考えるための準備作業の方途を伝えた

■ 後期実施内容

- 教養講座への参加を基本とし、受講についての連絡や情報共有をしつつ、個別に面談を実施し、受講態度や課題への取り組み方などを指導した

■ 前期教養ゼミの成果

受講者の将来の夢や目標を実現するために本学科で何を学ぶかを明確にする、学科に関する職業と学科の教育目標の関係が説明できるようになるという点はおおよそ達成できた。

新型コロナウイルス感染症への対応もあり、オンライン形式での実施が多くなったが、少人数ゼミの実施回数を増やし学生と教員との交流や学生間での交流の機会を設けることで、孤独感や孤立感を緩和し、共に学修する仲間がいることを意識させるようにしたことで、文献購読や資料調査など、一つ一つの課題に取り組む力が身についたように思われる。

■ 問題点, 改善点

横だけでなく縦のつながりを1年次からどのように作っていくかが課題になっている。このため、2021年度の交流プログラムでは、一部を2年生との協働とすることで、学年の枠を超えた活動を開始する試みを行なっている。

工学部 スマートシステム学科

■ 担当者氏名

代表：伍賀 正典

宮内 克之、三谷 康夫、仲嶋 一、田中 聡、香川 直己、関田 隆一、菅原 聡、沖 俊任、伍賀 正典

■ 実施内容

- 1 回目 (4/19) 数学到達度テスト
- 2 回目 (4/26) 自己紹介、図書館オリエンテーション
- 3 回目 (5/10) 授業の受け方、ノートの取り方
- 4～7 回目 (5/17、5/24、5/31、6/7) 小グループゼミ
- 8～15 回目 (6/14、6/21、6/28、7/5、7/12、7/19、7/26、8/2) グループワーク

■ 教養ゼミの成果等

- 初回では数学の習熟度をみるための試験を実施した。
- 2 回目では各自の自己紹介を行い、附属図書館に移動し図書館オリエンテーションを受講した。
- 3 回目では、基礎的なスキルとしてのノートの取り方や授業の受け方について指導した。
- 4～7 回目では、初回で実施した数学テストの結果から小グループに分けた。この小グループでゼミを行い数学基礎などの学力底上げを行った。
- 8～15 回目まで、グループワークとして 2 班に分かれて協働作業を行った。各班のテーマは、レスコンシーズのイベント実施、ガンダムプロジェクトとしてロボットの操縦席の製作である。ブレインストーミングや線表を用いたスケジュール、グループでの協調作業を経験した。
- グループワークのレスコンシーズ班、ガンダムプロジェクト班ともに、成果物を三蔵祭で展示することができた。また、レスコンシーズ班は、この実施内容を 11 月に遠隔形式で開催された、第 30 回計測自動制御学会中国支部学術講演会で口頭発表を行った。

■ 問題点、改善策、後期での対応策

- ここ数年、教養ゼミのグループワークを出発点とし、会発表や学外イベントなども実施している。今回のグループワークにおいても、学園祭での展示、地方学会での学会発表の成果を出すことができた。
- グループでの作業は学生間の交流を深める狙いがあるが、今回のグループワークは遠隔での実施が多く、学生間交流をはかるといふ効果を出すことは限定的であった。
- 今回の教養ゼミは、遠隔と対面の両面形式で実施を進めることが多かった。前半のオリエンテーション的内容、学力キャッチアップのための小グループゼミでは、対面・遠隔形式でもほぼ差支えがないようである。反面、グループワークでは、意欲的な学生とそうではない学生間に、これまで以上に差がしやすい。大学の初年次教育の科目という点を鑑みると、学生の興味を惹き、意欲的に取り組んでもらえる課題を提示していくことは望ましい方針であり、今後も深化させていくべきと考える。

工学部 建築学科

■ 担当者氏名

(代表・1年担任) 田辺和康、伊澤康一、酒井要
大島秀明、都祭弘幸、梅國章、佐藤圭一、藤原美樹、佐々木伸子、山田明、山本一貴

■ 教養ゼミの目的

建築の初学者に対する入門授業として、「建築」で取り扱うジャンルがデザイン・計画・歴史・環境・構造・構法といった理系から文系にわたる広範な分野を扱うことを知ることを目的としている。

自分が建築学科での学びにおいて、どのジャンルについて取組んでいきたいかを決めていくための第一歩として、各教員の専門性を活かした内容の少人数ゼミナール形式によるグループワークによって、「建築」が取組むジャンルや内容についての理解を深め、建築に対する興味の掘り起こしのキッカケづくりとしていく。

■ 実施内容

授業は、建築への興味と理解を深めていくために、7～8名の学生を全教員がゼミ形式で分担して担当し、第1回～14回までを各ゼミ単位でのグループワークをPBL (Problem-based learning : 課題解決型学習) 形式で進め、学生自らが課題を探すことから取り組みを始めた。

各ゼミ単位での取り組みにおいて、次の3項目を共通事項としている。

- 1) 対象フィールドは、松永を中心とした備後地域(松永・福山・尾道)を対象にする
- 2) 設定した「共通テーマ」を基に、各研究室で取組む具体的なリサーチ課題を設定する
- 3) 具体的に取組む内容は、各研究室の専門性・特長を生かした視点・内容で設定する

今年は、昨年度の反省から、建築の課題について考えられるテーマとして、「地域の課題を解決する」を共通テーマとして、各研究室の専門性を活かしたテーマを設定して取り組んだ。

最終回では、各ゼミ単位での発表を実施する予定であったが、令和4年1月11日からの新型コロナウイルス感染症対応の活動レベルが「レベル3」に引き上げられたため、各ゼミが制作したプレゼン資料と発表要旨をまとめたレポートを元に教員が評価を行う形式で実施した。

■ 教養ゼミの成果

7～8名のグループワーク形式で課題に取り組んだことにより、少人数体制だから可能となる濃密な意見交換・討論や共同で実施する資料リサーチや発表資料作りなどの学修活動を展開することができた。

■ 課題

新型コロナウイルス感染症対策の下という異例の事態での実施であったことから、各ゼミが取り組んだ成果を発表する機会を中止せざるを得なかったことから、各ゼミでの取り組み内容を相互評価することができなかった。

工学部 情報工学科

■ 担当者氏名

(代表) 金子邦彦

山之上卓、尾関孝史、金子邦彦、中道上、新谷敏朗、宮崎光二、池岡宏、森田翔太、吉原和明

■ 目的

1年次生に対し、少人数クラスを編成し、初年次教育の一環として、コミュニケーション、ディスカッション、プレゼンテーションなどの能力を伸ばす。あわせて、大学での学び、情報工学科での学びについて詳細を説明し、学生自らが大学でのより良い学びができるよう情報提供と指導を実施する。また、学生は、教養講座を受講し、幅広い学問的視野と教養を身に付ける。

■ 実施内容

例年、初年次教育として、履修上の注意点、資格取得、将来の進路について教えるとともに、レポートの作成やプレゼンテーションやコミュニケーションなど、大学での学びのための基礎力を養成している。令和3年度は、情報工学科で重視している資格であるITパスポートについて、その勉強法など、資格取得に直結する内容を具体的に教えることにより、資格取得への自信を深めること、情報工学科の学びについての視野を広げることも行った。

1. 教養ゼミについて、履修（必修、選択、出席回数、公認欠席、進級の条件、卒業の条件、レポートの書き方、先生とのコミュニケーション）、ITパスポート試験・過去問題集へのアクセス、研究倫理小テスト
2. 教務（3ポリシー、シラバス、出席回数、公認欠席、休講、補講、期末試験、資格試験合格による単位認定、GPA）、良い学びと有意義な学生生活のために
3. 就職、キャリア形成、情報工学科の進路
4. 学生生活、クラス担任、オフィスアワー
5. 資格取得、IT系の資格、資格試験合格による単位認定
6. ITパスポート（分野、問題形式、ITパスポート試験・過去問題集へのアクセス）
7. レポート、クリティカルシンキング、プレゼン資料の作り方
8. ITパスポート試験・過去問題集
9. 大学祭
10. 教養講座1
11. 教養講座2
12. 教養講座3
- 13-15. 大学での学び（情報工学科各先生からの課題を選択）

■ 成果等

成果は次の4点である。

- (1) 大学での履修の方法、4年間の各自の履修計画について理解が深まった。
- (2) 情報工学科の重要な資格である「ITパスポート」について、その内容を知り、理解が深まるとともに、各自が、試験対策に自主的に取り組む態度を取得した。
- (3) レポート作成やプレゼンテーションについては、見やすいプレゼンテーション資料の作成や、クリティカルシンキングを学び、演習した。そのことで、大学で学ぶ基礎力が養成された。
- (4) 教養講座の受講により、幅広い視野と教養が深まった。

工学部 機械システム工学科

■ 担当者氏名

木村純壮, 内田博志, 真鍋圭司, 坂口勝次, 加藤昌彦, 中東 潤, 関根康史, 小林正明

■ ゼミの学生数

クラス全体 32 名, 個別ゼミ 4 名 (クラス全体と少人数の個別ゼミを組み合わせ実施)

■ 実施内容

- 第 1 回 }
第 2 回 } 個別ゼミ (遠隔授業)
第 3 回 }
第 4 回 }
- 第 5 回 基礎教養ゼミ(1)大学とは—大学で何を学ぶか(内田・中東, 遠隔授業)
第 6 回 基礎教養ゼミ(2)大学とは—大学生としての自覚と責任(内田・中東, 遠隔授業)
第 7 回 基礎教養ゼミ(3)企画力とチームワーク1—大学祭イベントの企画書を作ろう(中東・内田, 遠隔授業)
第 8 回 基礎教養ゼミ(4)企画力とチームワーク2—大学祭イベントの計画書を作ろう(中東・内田, 遠隔授業)
第 9 回 (遠隔授業) }
第 10 回 (遠隔授業) } 個別ゼミ
第 11 回 (対面授業) }
第 12 回 (対面授業) }
第 13 回 (対面授業) }
第 14 回 (対面授業) }
- 第 15 回 特別講義「企業での開発・設計」:ダイキョーニシカワ(株) 杉山義孝 講師 (遠隔授業)
第 16 回 教養講座(1)「AIに負けない子育て～ことばは子どもの未来を拓く」(内田伸子 講師)(遠隔授業)
第 17 回 教養講座(2)「昔話に学ぶ幸運のヒント」(山 泰幸 講師)(遠隔授業)
第 18 回 教養講座(3)「市場は復権出来るのか 水産流通のミライ」(倉橋彩子 講師)(遠隔授業)
第 19 回 教養講座(4) (中止)
第 20 回 教養講座(5) (中止)
第 21 回 企業見学会 (中止)

■ 教養ゼミの成果等

○木村ゼミ

初年次教育として, 大学生活への適応や注意点, 基礎力の育成と大学生活の目標, 将来計画等をテーマとして取り扱った。第 5 回から第 8 回までは, 機械システム工学科 1 年生クラス全体によるアクティブラーニングを行った。テーマは, 「大学とは」, 「チームによる大学祭イベント企画書の作成」。例年は, 毎回の授業において, 説明・問題提起, 考察, 整理, プレゼンテーション, 質疑のプロセスを経るようして, 学生が自分で考えること, プレゼンテーションやディスカッションの機会が増えることを重視しているが, 新型コロナウイルス感染症の影響が継続し, 遠隔授業が多く制限が大きかった。課題, レポート中において, 可能な限り自ら考える機会を保つようにした。

○内田ゼミ

第 3, 4 回では, 大学新入生としての心構えや基本知識を学習し, 第 9, 10 回の図書館オリエンテーションとキャンパスツアーを通じて, 福山大学の全体像を把握した。第 5 回～第 8 回は, 学科共通の基礎教養ゼミとして, 大学生としての目的意識, 企画・計画力等について学習した。第 1, 2, 11 回は, 「映画から人生を学ぶ」と

して、大学生生活や若者の進路に関する映画を鑑賞して、感想を述べあった。第12回～第14回は「折り紙ロボットを作る」として、大学における研究の一端を学ぶとともに、制御系 CAE ソフトである Matlab の入門的内容を学習した。第15回の特別講義と3回の福山大学教養講座を通じて、社会全体に対する視野を広げた。

遠隔授業期間が長引く困難な面はあったが、授業順序の変更などで対応し、ほぼ計画通りの授業を実施した。複合的な要素を含んだ授業内容とすることで、初年次教育としての十分な成果が得られたものとする。

○真鍋ゼミ

今年はコロナ禍のなか、最初10回が遠隔授業であった。大学生活を始めるための基本的なことや注意点は遠隔授業でも説明できたと思う。5回から8回目までの基礎教養ゼミは1年生全員で、内田、中東先生の御担当により遠隔で全員で話し合いや討論を行った。7月からは対面授業で行ったが、数学を題材にして、パソコンを持参し、パソコンでの数式入力やグラフ作成を行った。プレゼンテーションは十分には行えなかった。

○坂口ゼミ

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、遠隔授業が多くなった。

「SDGs (ゴール 7) エネルギーをみんなに そしてクリーンに」を統一テーマとし、学生が個々に設定した各テーマは、風力発電、水力発電、海洋エネルギー、太陽エネルギーであった。現在のエネルギー事情や地球環境の現状と危機を踏まえ、これら個々のテーマの原理・仕組みや問題点と解決策について情報収集・分析・整理した結果をまとめ、発表した。これらの学修によって、持続可能な循環型社会をめざして技術者として社会に貢献する態度を醸成する意味でも、本学科での学修の意義を確認する機会になったと思われる。

また、大学での学修に関する技能・態度、基礎教養ゼミを通じて大学での学び等の態度を身に付ける取組み、企業人(技術者)による産業界でのモノづくりの現状と技術者の仕事と心構えを知るための「特別講義」を開催した。これらの取組みが、これからの学修生活をどのように送るかを具体的に考える良い機会になったと思われる。

○加藤ゼミ

第1～4回で、教養ゼミの意義、大学での勉強方法、生活態度、就職のための準備等について説明し、今後の勉学・生活面で進むべき方向を理解させた。第5～9回では、基礎教養ゼミとして大学教育の意味、創造性を醸成させた。第10～14回では、機械工学専門科目の一つである材料力学のイントロ講義として、ケント紙を使ったコンテスト競技型授業を行った。

○中東ゼミ

このゼミでは、最後にこの授業を通じて学んだことや感想についてのレポートを提出してもらっている。受講生の主な感想等は以下の通りである。

- ・大学と高校での学生生活についての違いを学んだことが勉強になった。
- ・大学での学び方、教わる内容について知ることができた。
- ・単位の取得や授業の取り組み方など、大学のことを多く学べた。
- ・自分将来に向けて、1年生の頃から考えないといけないと思った。
- ・マナーや学生生活、キャリアデザインについて学ぶことができて良かった

また、学生が騙される危険についてこの授業では取り扱っているが、これについても十分に気を付けたいとの感想があった。

コロナ禍につき教養講座の一部と企業見学会は中止となったが、学生個々で感じたことや得るものがあったと考えられる。

○関根ゼミ

今年度配属された学生4名であった。なお、前期における授業については、コロナ禍のため前半は遠隔授業となってしまうが、後半は対面での授業を実施した。全員出席率も良く、特に問題はなかった。授業内容については、技術者倫理に関することや、最近社会的に問題とされている高齢ドライバーの事故、以前に倉敷市消防局から依頼のあった衝突事故を起こした大型トラック(運転室改造車)の乗員救出法のイメージトレーニングに関する内容等をテーマにした。なお、今年度も図書館の見学は中止した。

○小林ゼミ

本年度の前半は遠隔授業での実施となった。前半は、Zoom を用いて大学での勉強内容だけでなく学生生活や就職活動などについても説明を行った。Zoom を用いて SGD 形式で実施したことにより学生通しのコミュニケーションをとることができより深く理解ができたものと思われる。基礎教養ゼミもセレッソを用いたりリモート形式で実施した。後半は、対面形式での実施となった。簡単なモノづくり教材を用いてモノづくりの大切さ、レポートの作成方法、プレゼンテーションの方法などを学習した。受講生は教養ゼミの時間だけでなく講義の空き時間などを使って各テーマに取り組んでいた。モノづくりに挑戦することで創造する楽しさや達成感を得ることができたと思われる。

■ 問題点, 改善点, 次年度までの対応策

○木村ゼミ

遠隔授業が多く、アクティブラーニング等思い通りに実施できなかった。ICT, BYOD の活用は、さらに進んだ。遠隔授業の準備・実施にも、問題はなかったと思われる。

○内田ゼミ

令和3年度は令和2年度に続いて、コロナウイルスの影響で遠隔授業期間と対面授業期間が途中で切り替わり、授業の順序や一部の内容を変更する必要が生じたほか、工場見学や教養講座の一部が中止となった。教養ゼミに限ったことではないが、今後の授業ではこうした場合に柔軟に対応できるよう、Cerezo を活用して対面と遠隔の両形態での授業を準備しておくなどの、対応が必要であると考えます。

○真鍋ゼミ

今年は欠席者が少なく、メンバー全員が単位取得できた。学生同士のコミュニケーションは、高校時代の知り合いのメンバーと、その他の学生で壁があるように思い、十分ではなかったと感じた。コロナ禍の中、お互い会話するのが控えめになり、コミュニケーションをとること自体が難しかったと思う。来年度は、お互いで話し合いやすい雰囲気を作ろうと思う。

○坂口ゼミ

SDGs の中で技術に関する多様かつ具体的な話題提供に努めるとともに、自由な発想を促す授業作りについて検討する。

○加藤ゼミ

オンラインと併用で実施した。第10～14回はアクティブ型授業としており、BYOD パソコンを活用した。学生の学習意欲が高い授業とすることができた。

○中東ゼミ

コロナ禍の中で遠隔授業が多かったが、上述のように学生自身はそれなりに学んでくれたものと考えている。引き続き学生にとって有意義な教養ゼミを行っていくことと、図書館セミナーや企業見学会が再開できるのであれば学生には出席して欲しいと思う。

○関根ゼミ

今年度の教養ゼミについては、欠席もほとんどなく、問題となることは無かった。次年度においても、もし対面で教養ゼミができる時期があれば、座学だけでなく、実験のようなことを実施していきたいと考える。また、図書館の見学も実施したい。

○小林ゼミ

前半の遠隔授業は、学生間でのコミュニケーションをとるためZoom形式で実施した。Zoom形式での実施は対面授業と違いコミュニケーションの取り方など戸惑うことが多かった。Zoomでのコミュニケーションの取り方などの課題が残った。後半の対面形式での実施では、モノづくり教材を用いてモノづくりを実施した。積極的に取り組んでいる学生とそうでない学生との取り組み方が異なっていた。学生が制作した作品を用いてコンテスト形式にすることによって授業に対するモチベーションを上げることができた。

生命工学部 生物工学科

■ 担当者氏名

(代表) 松崎浩明

山本覚、久富泰資、岩本博行、佐藤淳

■ 生物工学科教育プログラムにおける教養ゼミの位置付け

生物工学科では、学習意欲を高め、目標を設定し達成することを目的として、演習科目や実験科目を教育プログラムに多く取り入れている。本学科カリキュラムにおいて教養ゼミは、本学・本学科の教育の特徴の理解を深めさせ、一般教養を高めながらさらに幅広く事象に対する興味を喚起する科目として位置付けて開設している。さらに、初年次教育として、受講生が高校から大学の学修・生活へスムーズに移行し、またセミナーや実体験を通して受講生同士及び受講生と教員間で密にコミュニケーションを取ることで教員や友人との信頼関係を構築し、協調性や自主性を育成することを目指す。コミュニケーション力を育成するためにプレゼンテーションやディスカッションなどを積極的に取り入れて実施している。

■ 実施内容

<前期>

- 第1回 教養ゼミガイダンス、オリエンテーションの補足
大学における履修と学修 -「大学での履修」や「生徒と学生の違い」を考える-
- 第2回 学生生活について -どのような学生生活を送るかを考える、自己管理術、年間目標の作成-
- 第3回 大学での学習に向けて -学修スキル（講義の聴き方、ノートの取り方）を学ぶ-
- 第4回 大学での学習に向けて -書物、新聞、インターネット、および学術雑誌による情報収集を学ぶ-
- 第5回 大学での学習に向けて -学修スキル（リーディング）を学ぶ-
- 第6回 バイオの歴史 -古典的バイオについて知る-
- 第7回 バイオの歴史 -現代バイオについて知る-
- 第8回 生物工学科における研究 -大学ホームページ等での研究の調査-
- 第9回 生物工学科における研究 -研究紹介の発表原稿の作成-
- 第10回 大学祭学科展示の企画 -過去の展示企画の紹介、過去の展示企画に対する意見・感想-
- 第11回 大学祭学科展示の企画 -展示企画を考える-
- 第12回 バイオの歴史 -ニューバイオについて知る- 遺伝子組換え食品の安全性について考える
- 第13回 最近のトピックス -最近のトピックスの情報を収集し、内容とコメントをまとめる-
- 第14回 最近のトピックス -小論文作成法を学び、最近のトピックスの原稿を修正-
- 第15回 前期の学修・生活を振り返って -前期の総括を行い、後期にどのようにするか考える-

<後期>

- 第16回 第1回教養講座 内田 伸子先生 「AI に負けない子育て～ことばは子どもの未来を拓く」
- 第17回 学生生活について -年間目標の達成に向けた自己点検-
- 第18回 学修スキル -実験ノートの作成法を学ぶ-
- 第19回 学修スキル -実験データの整理法を学ぶ-
- 第20回 学修スキル -実験レポートの作成法を学ぶ-
- 第21回 研究調査発表の準備 -大学祭の展示の代替となる研究調査発表の準備（1）-
- 第22回 第2回教養講座 山 泰幸先生 「昔話に学ぶ幸運のヒント」
- 第23回 研究調査発表の準備 -大学祭の展示の代替となる研究調査発表の準備（2）-
- 第24回 研究調査発表 -大学祭の展示の代替となる研究調査発表-

- 第 25 回 研究調査発表の総括 -研究調査発表の総括、発表改善のグループディスカッション、報告-
- 第 26 回 第 3 回教養講座 倉橋 彩子先生「市場は復権出来るのか おさかなと水産流通のミライ」
- 第 27 回 キャリア設計 -卒業後の進路の可能性について知る、挨拶、マナー、礼儀を知る-
- 第 28 回 キャリア設計 -資格取得やインターンシップについて知る-
- 第 29 回 2 年次の学修に向けて -将来の夢を達成するための学修計画を立てる-
- 第 30 回 1 年次の学修・生活の総括 -学修・生活を総括し、どのような教養を身に付けたか考える-

■ 成果について

- (1) 遠隔授業が多かったが、ゼッソやゼルコバを通して、また対面授業の時は直接、教員が受講生とできる限り緊密なコミュニケーションを図りながら、新入生オリエンテーションの補足、「大学での履修」、「生徒と学生の違い」、「学修スキル」の解説、大学における学生生活の指導を行うことで、受講生が高校から大学の学修・生活にスムーズに移行でき、また学修意欲を高めることができた。
- (2) 年間目標を設定することで充実した生活を送れ、目標を達成することで自己を成長させることができた学生がある程度いると思われる。新型コロナウイルス感染症の流行のため、充実した生活や目標達成が困難であった学生もいた。
- (3) 古典的バイオと現代バイオを紹介する講義の受講や生物工学科における研究の調査によって、生物工学に対する興味が増し、学修意欲が向上した。また、最近のトピックスの情報を新聞、テレビ、インターネットのホームページなどから収集する方法と情報の整理方法を学んだ。実際に情報を収集して、内容を要約し、トピックスに対する自身の意見を述べ、幅広い教養を身に付けるためのスキルを修得できたと思われる。最近のトピックスについては何回か課題を提出することで効果があったと思われる。
- (4) 講義の聴き方、ノートの取り方、リーディング、実験ノート作成、実験データ整理、レポート作成を指導することで、学修スキルとこれらを行う習慣を身に付けることができた。
- (5) 生物工学科では、新型コロナウイルス感染症の感染予防のため大学祭での対面による学科展示は中止とした。1 年生は、代替として教養ゼミで研究調査発表を実施した。これにより、協調性、自主性、コミュニケーション力、プレゼンテーション力を育成し、また教員や友人との信頼関係を構築できた。
- (6) 挨拶、マナー、礼儀を幾らか醸成することができた。
- (7) 卒業後の進路や将来の夢について考え、これらの実現に向けて、キャリア設計を検討し、2 年次の学修計画を立てた。

■ 次年度への課題

- (1) アクティブラーニングとして、大学祭の対面による展示発表を実施する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、実施できなかった。協調性、自主性、コミュニケーション力などを育成する機会が減った。
- (2) 新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、遠隔授業が多く、学生と直接コミュニケーションを取る機会が減った。

生命工学部 生命栄養科学科

■ 担当者氏名

(代表) 菊田安至
田中信一郎、山本英二、井ノ内直良、石井香代子、西 彰子、吉田純子、村上泰子、中崎千尋

■ ゼミ数, ゼミの学生数

学生数:27 ゼミの学生:5~6名 (前期:クラス全体と少人数制ゼミを組合わせて実施)

■ 前期実施内容

- 第1回:生命栄養科学科入門1 》遠隔・学科のカリキュラムを知る (担任:中崎、村上、山本)
- 第2回:生命栄養科学科入門2 》遠隔・大学生活を組み立てる(学生生活指導、学科ルールなど)(担任)
- 第3回:学修スキルの修得1 》遠隔・大学の講義とノートの取り方(西)
- 第4回:管理栄養士のキャリアプラン1 》遠隔・目指せ! 管理栄養士資格取得 (井ノ内、石井)
- 第5回:学修スキルの修得2 》遠隔・読解力を身につけよう!(村上、西)
- 第6回:学修スキルの修得3 》遠隔・自分の考えを整理する力(論理的思考を身につけよう)(村上、西)
- 第7回:大学の施設を知る:図書館、保健管理センター訪問(担任:中崎、村上、山本)
- 第8回:社会人マナーの醸成1 》遠隔・環境に応じた対応力を身につけるには?(石井、山本)
- 第9回:社会人マナーの醸成2 》遠隔・効果的に意見交換をする為には?(石井、山本)
- 第10回:生命倫理①:管理栄養士に必要なこと(ヒトの尊厳と倫理)(田中、村上、菊田)
- 第11回:生命倫理②:保健・医療・介護における倫理的判断(田中、村上、菊田)
- 第12回:生命倫理③:ヒトの生と死 (田中、村上、菊田)
- 第13回:大学祭を考える 》クラスでつながること(久保田、吉田)
- 第14回:幅広い教養の修得 》遠隔・第1回教養講座 講師:内田伸子氏 /中止※
- 第15回:幅広い教養の修得2 》第2回教養講座 講師:穴戸仙助氏 /中止※

■ 後期実施内容

- 第16回:生命栄養科学科入門3 》国試模試のリフレクション、後期授業開始にあたって(中崎、村上、山本)
- 第17回:地域との協働(ローズスクエアへの参加)①;校外活動準備(山本、菊田、井ノ内)※中止
- 第18回:地域との協働(ローズスクエアへの参加)②;校外活動(山本、菊田、井ノ内)※中止
- 第19回:大学祭に取り組む① 大学での発表テーマの検討、協働の体験(菊田、村上)
- 第20回:大学祭に取り組む② 大学での発表テーマの検討、協働の体験(菊田、村上)
- 第21回:大学祭に取り組む③ 大学での発表テーマの検討、協働の体験(菊田、村上)
- 第22回:大学祭参加のリフレクション 》自分にできたこと、できなかったことは何か?(菊田、村上)
- 第23回:地域との協働(ローズスクエアへの参加)③;リフレクション(山本、菊田、井ノ内)
- 第24回:栄養計算①食品成分表を使って栄養計算をしてみよう!(吉田)
- 第25回:栄養計算②栄養計算ソフトを栄養計算をしてみよう!(吉田)
- 第26回:卒業研究発表会の聴講 》遠隔/研究の面白さを覗いてみよう!(中崎、村上、山本)
- 第27回:臨地実習とは? 》遠隔/臨地実習出発式・臨地実習発表会の聴講(中崎、村上、山本)
- 第28回:幅広い教養の修得 》第3回教養講座 倉橋彩子氏 /中止※
- 第29回:幅広い教養の修得 》第4回教養講座 講師:山 泰幸氏 /中止※
- 第30回:幅広い教養の修得 》第5回教養講座 講師:山田 満氏 /中止※

※/中止=コロナウイルス感染拡大に伴い中止となった(多数が密集する場所での講義は不可)

■ 教養ゼミの成果

令和3(2021)年は、新型コロナウイルス感染症対応のため、授業が遠隔授業(セレッソ活用)となり2年目である。通常の教養ゼミの実施が困難となった部分と感染状況を勘案・大学の授業実施体制とも検討しながら、対面での取り組みも可能な限り実施した。前期において、大学生生活への導入など遠隔授業及び対面で進めながら、順番の入替等も実施し、授業の受け方やノートの取り方など、大学生生活における学修の基本事項を指導した。また、管理栄養士の立場における倫理観の基礎知識を学び、プロフェッショナルとしての意識付けのスタートアップ授業を行った。

後期は、大学祭を機会にコミュニケーション能力の向上を目指す予定であったが、大学祭が遠隔となり、オンデマンドでの動画配信や情報発信の素材作成をすることで学生指導に替えた。可能な限り、対面で授業も行ったが卒業研究発表会、臨地実習発表会など高学年の発表への参加は、オンデマンドの動画等の情報を視聴する形式にして、学修の継続を維持した。

■ 問題点, 改善点, 次年度に向けた課題

新型コロナ感染症拡大による大幅な授業の変更を余儀なくされた。日本全体が新型コロナウイルス感染症への対応を模索しており、個々の状況により対応を継続した1年間であった。大学での遠隔授業の導入・実施で、新入生にとって不安の大きいものであったと推察する。

管理栄養士の専門職としての意識付けも将来の職業選択には重要である。そのことはまた、今後の学修課程の進行で経験する様々な専門科目や実験・実習での学びがあり、学修のモチベーションにも影響を与える。学生の理解や意識の向上を目指した遠隔授業の充実、対面授業の最大限の活用を検討し、学力向上と共に学力不足の学生に対する担任からの支援を充実させる。担任との面談など直接的なコミュニケーションの機会を早期に実施し、回数も考慮して学生の不安感や問題点の把握に努めることが重要であろう。

生命工学部 海洋生物科学科

■ 担当者氏名

(代表) 三輪泰彦

■ ゼミ数, ゼミの学生数

ゼミ数: 14 名

ゼミの学生数: 8-9 名

全学生数: 113 名

■ 前期実施内容

- 1) 全体ガイダンス: 教養ゼミの内容説明、履修、授業 (セレッソの小テスト、レポートの提出対応など)、試験、学習支援等の補足説明、セキリティーソフトのインストール対応、研究者 (学生) 求められる研究倫理の説明
- 2) 自己紹介 (自己紹介シートおよび自己紹介発表原稿の作成)
- 3) 個人面談-学生生活、欠席調査など
- 4) 教務関係、学生関係の指導など
- 5) 前期定期試験への心構え

■ 後期実施内容

- 1) 個人面談-前期の履修状況、学生生活、欠席調査など
- 2) 教務関係について
- 3) 環境調査会社及び水産試験場の仕事について
- 4) 国や地方自治体の水産試験場の仕事について
- 5) 水産関連の地方公務員上級職の受験対策について
- 6) 生物分類技能検定の資格について
- 7) 学芸員資格及びインターンシップについて
- 8) 食品衛生管理者・食品衛生監視員の資格及びその進路先について
- 9) 大学院進学について
- 10) Zoom による個人面談
- 11) 後期定期試験への心構え

■ 教養ゼミの成果等

- 1) 新型コロナウイルス感染拡大の中で、前期・後期を通じて機会が非常に少なかったが、自己紹介や個人面談などを少人数体制で行い、学生と教員、学生同士である程度コミュニケーションをとることができた。
- 2) 本学の活動指針に基づき、後期は1学年113名を大講義室に集めての対面授業を実施することができなかったことから、本学科で何を学べるか、本学科でしか学べない事は何か、また本学科で学ぶことで将来どのような進路を目指すか等について学生に明確に伝え、学生のモチベーションを高めるような遠隔授業を行った。
具体的には、各教員が4つの専門コースで取得できる資格 (教員免許、学芸員、食品衛生管理者及び食品衛生監視員、生物分類技能検定など) や様々な分野の進路先 (公務員【水産試験場】の仕事や受験対策、環境調査会社の仕事、研究機関、大学院など) の内容について遠隔授業を通じて紹介した。

これらの内容を受講した結果、新入生は3年次において4つのコースでどのような専門的な内容を学びたいのか、どのような資格を取得したいのか、将来どのような進路先で活躍したいか、などを考えるために必要な情報を得ることができた。

■ 問題点, 改善点, 対応策

- 1) 令和3年度も令和2年度と同様に、新型コロナウイルス感染拡大による対応のため、例年の「大学祭の学科の展示・企画」について、各グループで提案された企画案について、1学年(113名)を介してプレゼンテーションや全体討議を行うことができなかった。令和4年度は学科全体で新型コロナウイルスの感染防止対策と学生の健康管理を徹底して行い、本来のキャンパスライフに戻していきたい。
- 2) 令和2年度はコロナ禍の中で学生生活や教務(履修方法、欠席調査、ゼルコバやセレッソの操作方法、定期試験への対応など)の情報を学生に十分に周知させ、サポートすることができなかった。
特に、ゼルコバやセレッソの操作方法のICTサービスのサポートができなかった点を踏まえて、令和3年度は「オリエンテーション」や「教養ゼミ」を通じて新入生が遠隔授業を円滑に受けられるように、ゼルコバやセレッソの操作法の指導とともに、適切なタイミングで担任や授業担当者が新入生にゼルコバやセレッソを活用したシミュレーションを実施し、操作に習熟できるようサポートを行った。
- 3) コロナ禍において大学に通学する機会が少なかったり、遠隔授業のみで実家に帰省していたりすることから、対面での面談が困難な際には、「Zoom」を活用して学生生活や学修状況について個人面談を実施した。
- 4) コロナ禍の中で教養ゼミの大半を遠隔授業で実施したが、学生同士のコミュニケーションが少なかったせいか、友人をつくる機会が減った。令和4年度はコロナ禍においても可能限り、対面授業を増やして、学生同士が親睦を深めることのできるイベントを企画していきたい。
- 5) 本学科では学生実験や会議、出張等によって一部の教員はスケジュール合わせができないことがある。特に、因島キャンパス専任の教員は、因島キャンパスから本学に移動するため、今後は「Zoom」などを活用して個人面談や遠隔授業を取り入れて、きめ細やかな学生生活のサポートを行っていきたい。

薬 学 部

■ 担当者氏名

(代表) 山下純

(担当) 井上裕文、前田 頼伸、高根 浩、猿橋 裕子、広瀬 雅一(薬学入門担当)

坂根 洋、柴田紗知、重永 章、大西正俊、竹田修三、白川 真(クラス担任)

■ ゼミ数, ゼミの学生数

新入生 96 名に対し、薬学入門 I ならびに教養講座において教養ゼミを実施した。

■ 実施内容

1 薬学入門 I (担当責任者: 山下純)

5月17日と24日は、外部講師による対面授業を行った。また、6月14日から7月7日までの対面授業では、学年を3つのクラスに、クラスをさらに3つのグループに分けて、グループ単位でスモールグループディスカッション(SGD)を行い、薬学入門担当教員(1名)ならびにクラス担任(1名)がチューターとしてクラスごとに指導を行った。それ以外はオンデマンド形式で実施した。 ※日程・授業概要は別紙参照

2 教養講座(担当責任者: 山下純)

第1回教養講座【オンデマンド方式】

令和3年9月22日(水)から9月29日(水)まで

講師: 内田 伸子 氏 (IPU環太平洋大学教授、お茶の水女子大学名誉教授)

演題: AIに負けない子育て～ことばは子どもの未来を拓く

第2回教養講座【オンデマンド方式】

令和3年11月2日(火)から11月10日(水)まで

講師: 山 泰幸 氏 (関西学院大学 人間福祉学部 教授)

演題: 昔話に学ぶ幸運のヒント

第3回教養講座【オンデマンド方式】

令和3年12月7日(火)から令和3年12月14日(火)まで

講師: 倉橋 彩子 氏 (株式会社クラハシ 専務取締役)

演題: 市場は復権出来るのか おさかなと水産流通のミライ

■ 教養ゼミの成果等

学生が主体となって能動的に学習・情報共有、さらに体験することによって『気づきの学習』を実践することで、学生の行動変容のためのきっかけ作りになる。上記の学習により、次の事項について向上ならびに醸成を得たと考える。

- ・学生-教員間ならびに学生同士のコミュニケーションの活性化
- ・薬学生としてのモチベーションの醸成
- ・情報の収集と処理ならびにプレゼンテーションなどの能力の向上
- ・能動学習のための動機づけ
- ・問題解決能力の向上
- ・挨拶、マナー等の社会性の涵養

■ 問題点, 改善策等

- ・学生のアンケート調査によって、改善を行っている。

2021年度「薬学入門Ⅰ」		* 遠隔授業は赤字で表示													
日程	4月19日(月)	21日(水)	26日(月)	28日(水)	5月10日(月)	12日(水)	17日(月)	19日(水)	24日(月)	26日(水)	31日(月)	6月2日(水)	7日(月)	9日(水)	
授業形態	オンデマンド	予備日	オンデマンド	予備日	オンデマンド	予備日	対面 34号館2階 研修室1&2	オンデマンド	対面 34号館2階 研修室1&2	予備日	予備日	予備日	予備日	予備日	
3限	全クラス		全クラス		全クラス		菅 P1A, P1B, P2A	全クラス	山中 P2B, P3A, P3B						
4限	全クラス		全クラス		全クラス		菅 P2B, P3A, P3B	全クラス	山中 P1A, P1B, P2A						
5限							菅 全クラス		山中 全クラス						
授業内容	「今心にあること (希望、期待、不安)」について自己 学習		「人にやさしい薬・ 良い薬(薬の種類や 分類)」について自 己学習		「薬剤師の仕事の種 類」について自己学 習		【ヒューマンズ・ コミュニケーション 】行動変容のため の役立ち感と幸せに ついて気づきの学習 をする		「病院・保険調剤 薬局の薬剤師の仕 事」について自己 学習						
日程	6月14日(月)	16日(水)	6月21日(月)	23日(水)	28日(月)	30日(水)	7月5日(月)	7日(水)	12日(月)	14日(水)	19日(月)	21日(水)	24日(土)		
授業形態	対面 34号館2階 研修室1&2	対面 34号館2階 研修室1&2	対面 34号館2階 研修室1&2	対面 34号館2階 研修室1&2	対面 34号館2階 研修室1&2	対面 34号館2階 研修室1&2	対面 34号館2階 研修室1&2	対面 34号館2階 研修室1&2	対面 20号館1階 講義室	対面 20号館1階 講義室	予備日	予備日	予備日		
1限		P2B, P3A, P3B		P2B, P3A, P3B		P2B, P3A, P3B		P2B, P3A, P3B							
2限		P2B, P3A, P3B		P2B, P3A, P3B		P2B, P3A, P3B		P2B, P3A, P3B							
3限	P1A, P1B, P2A		P1A, P1B, P2A		P1A, P1B, P2A		P1A, P1B, P2A		全クラス	全クラス					
4限	P1A, P1B, P2A		P1A, P1B, P2A		P1A, P1B, P2A		P1A, P1B, P2A								
授業内容	「今心にあること(希望、期待、不安)」 についてSGD(KJ法)		「人にやさしい薬・良い薬(薬の種類や 分類)」についてSGD(KJ法)		「薬剤師の仕事の種類」についてSGD(マ インドマップ)		「病院・保険調剤薬局の薬剤師の仕事」に ついてSGD(イメージマップ)		薬剤師に質問してみ よう(病院)	薬剤師に質問してみ よう(薬局)					

大学教育センター